



FOA・EAST NEWS

NO. 1

1988.2.5

新体制を祝して

日本アメリカンフットボール審判協会
理事長 笹田 英次

今、フットボール関係者の永年に亘る様々の努力が実って興隆のきざしが表れて居ます。この機会を逃さない事がフットボールに関係するものの重要な責務だと思います。

そういった中で、関東審判部が自分たちの力で組織替えをして、益々良い審判員の育成に力点を置こうという事は真に時宜を得たものだと思います。

良いゲームをふやすためにはチームの努力が第一ですが、その努力を無駄にしないような適切なゲームコントロールこそ審判にとって最も必要な事です。色々な視点から審判員の育成が出来る組織がこれから重要だと思いますし、出来た器を十分に生かす事が審判部の重要な課題になるものと思います。全員の協力があってこそ生かせる事です。ベテランもフレッシュマンも一緒になって協力してこそ、益々良い審判部になり、良い審判員になるでしょう。

思い起せば私が審判員になった昭和31年にはゲーム数も少なかったけれど、実働10数名の家族的な審判部でしたが、それから30年余りも経た今は10倍、個人商店も一寸した会社に変ったようなもので、それなりの組織が必要な時期でもあったのでしようが、今後はこの会社に私も一員として努力します。皆様も一緒になって頑張ってください。たとえフットボール界の縁の下での力持であったとしても、益々研さんを重ねて良い審判員、良いクルーとして、フットボールの発展に力を貸して下さる様切にお願い申し上げます。

FOA・NEWS 発刊に寄せて

部長 水田 吉春

34年前、昭和29年審判協会が組織され、多くの先輩達のボランティアの結果、今年度134名という関東審判部に成長しました。毎年入部する優秀な新人達、それを指導育成する熱心なベテランの方達。先輩から引継がれた伝統は確実に後輩達に受継がれています。

特に'87年度は全員の努力で理事会が発足し、より具体的な集団指導体制とも言える理想的な執行部が誕生、その中でこの"FOA・EAST・NEWS"の発刊を実現できたことは、全員の大きな収穫であります。今年度スタートした各プロジェクトが急ぐことなく、一步一步確実に前進し、その輪を広げて行きたいと願います。

我が国のフットボールの普及が今や全国的な広がりを見る今日、我々は少しでも多くの体験と研究を積み重ね、如何なるプレッシャーにも、それを切さ琢磨の糧とすべく、研さんを重ねようではありませんか。

私の思い出 (1)

日本アメリカンフットボール協会
理事長 安藤 信和

人間は何か一つの物事に取組もうと思う場合、必ずその人個々に動機があり理由があり、又それなりの目的があるといます。そしてその動機なり目的が強固であればある程、一生懸命にその仕事に取組むであろうし、長続きもするし、又成功する確立も高い筈です。審判部の若い諸君も、個々それぞれに、又それなりの動機があって関東審判部に入られたことと思う。是非皆さんすばらしい審判員になって下さい。

私も昭和29年に立教の服部先輩のすすめもあり審判をやるようになったわけですが、私も私なりに二つの大きな理由があった訳です。実は昭和20年の終戦時軍籍にあった私はエトロフ島の守備隊にいましたがソ連軍の武装解除を受け、そのままシベリヤに抑留され、昭和24年秋無事帰国することが出来ましたが、その間、私はほとんどが鉄道工事で一年の半分位は寒さを感じる中、特に冬は零下40-45度の寒さの中での作業。当時はソ連も食料難の為、我々日本人にも満足な食料は与えられず、寒さと食料不足でその年の冬を越せなくて死亡した仲間は相当あったと思います。そうした環境の中で私は病気にもならず、寒さにも負けず無事日本に帰れましたが、それは学生時代(戦前の大学は予科3年、学部3年の計6年)、日曜日も休まず毎日激しいフットボールの練習で体を鍛えてあった為であり、云うならばアメリカンフットボールのお陰だと感謝しておりフットボールの為に何かしなければいけない

………何かをしよう、それが審判をやる気になった一つの大きな動機であり理由でした。

もう一つの動機としては昭和27-28年の2年間OB会の決定で関東連盟の理事を命ぜられました。理事の仕事は2年の任期で場合によっては又変えることもあるので、自分の意志で永くフットボールに貢献出来る道は………その点で審判は経験を積みれば積むほど優秀な審判にもなれるし又皆同じ目的の下で動いてゆける、そんな理由もあって審判をやるようになった訳です。当時はまだ6大学しかなくリーグ戦のゲーム数も少ないものでしたが現在の様な審判組織がなく、ゲームを見に来たOBをその都度「お前ちょっと手伝ってくれよ」と先輩に云われやっと4人の審判をそろえてゲームを消化していた時代でしたがそれではまずいと云うので審判部を作ることになり、私もその一員になったと記憶しています。

その後色々苦勞話があるわけですが与えられた紙面の都合で次回にゆずることにします。

審判員を希望して

飯島 秀男

アメリカンフットボールの審判員を希望して本当によかったと思います。

大学に入ってからフットボールを始め、実業団チームを引退するまで、14年間選手として過して来て、審判の役割とか実態と言ったものは全く気に掛けていませんでしたが、人数が少ないとか、苦しい状態だと言う話を耳にして、役に立てばと思い、また、何らかの形でフットボールに携わっていたかったので参加しました。

月に2回行われるクリニックでは、活発に反省や意見の交換があり、適切な指導がされていて、適時に、新人には新人のための、地域では地域別のクリニックも催されていますが、この様にレベルに合った指導が成されていること

は、私の様に初めて経験する者にとって大変有難いことです。

1987年の春から秋のシーズンに2,30試合の審判を経験しましたが、既に選手の時に経験した数百試合とは全く別の意味で審判の試合における重要性、責任の重さ、ボランティア性を痛感しました。

集団スポーツとりわけ格闘技で大切なことは、ルールを守ることであり、協力し合い、自分の責任を果たすことだと思います。また、審判団もルールおよびメカニクをよく理解し知ることであり、クルーは協力し合い、自分の責任においてゲームを円滑に進行させ、公平にジャッジすることにあると、学びましたし、私もその様に思います。

いつも指導されているように、審判は決して反則を期待するのではなく、反則の無い好ゲームを期待すべきであると考え、また、またそういうゲームに導くべきでしょう。

頂点に立つのは1チームかもしれませんが、そこにはどのチームも権利があり、チャンスも有るはず。私もフットボールが大好きなのでそんな人達のお役に立てば、思っております。

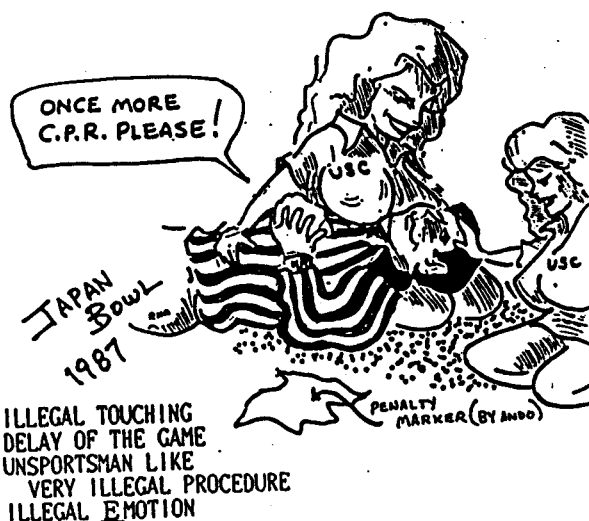
オフィシエイティングの基礎 (その1)

インストラクタ委員 坂井 淳

はじめに

本稿は、この1年間FOAクリニックで色々なインストラクタがお話しした内容の内、基礎的なメカニク等を取りまとめてみたものです。かなり初歩的な事項も含んでおりますが、是非、昨年自分の担当したゲームを思い出し、振り返っていただきたい。反省と勉強とが優秀な審判員になれる秘訣です。

さて、最も身近な「野球」の場合、【アウト/セーフ】、【ストライク/ボール】、【ファウル/フェア】の判定が



Illustrated by Robert H. Beveridge

この面白いゲームのキを握っていることは言うまでもありません。

我等が“フットボール”においても、同様に重要な判定があります。それは簡単にいうならば、【フォワード・プロGRESS】、【アウト・オブ・バウンズ (OB) / インバウンズ (IB)】、【コンプリート / インコンプリート】と【タイムアウト / タイムイン】ということが出来るでしょう。

野球は“点とりゲーム”、フットボールは“陣とり・時間とりゲーム”という違いはありますが、審判員の判定がゲームの生死を決しております。これらの判定は重要ですが、極めて単純です。ベテラン、新人関係なく全ての審判員は、公正に、明快到適時に、さわやかに判定を下す必要があります。さあ、今年もさわやかに頑張しましょう。

1. フォワード・プロGRESS

1. フォワード・プロGRESS (2-8-2) とは、ボールの最前進地点である。

2. ラン又はフォワード・パスのフォワード・プロGRESS

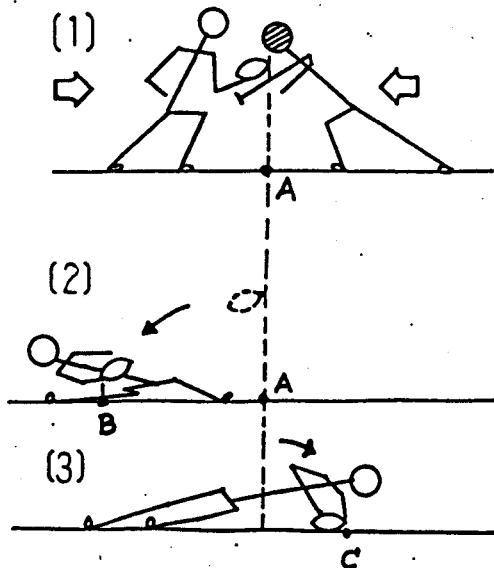
(1) ラン又はパス・キャッチ。そしてタックル。最前進地点はA点。

(2) a. タックルされて後方へダウン。最終的ボールの位置はB点。この場合のフォワード・プロGRESSはA地点である。

b. 但し、ランナーが(1)の後、走り回った結果(2)の状態になった場合、フォワード・プロGRESSはB点で良い。

c. 又、状況から判断して、A点がフォワード・プロGRESSとなることが明らかな場合、ホイッスルを吹いてデッドとするのが良い。

(3) a. タックルされたが、ランナーが踏ん張り前方に倒れてダウン。最終的ボールの位置はC点。この場合のフォワード・プロGRESSはC点である。



b. 但し、(1)の後、ホイッスルが吹かれていればB点でよい。

c. ランナーとタックラーが競っている場合、良く見てからホイッスルを吹こう。さらに前進するかも知れないし、フアンブルがあるかもしれない。

3. サイドライン近くのプレー

(1) ラン又はパス・キャッチ。そしてタックル。最前進地点はA点。(IB)

(2) a. タックルされ後方へOB。最終的ボールの位置はB点。この場合のフォワード・プロGRESSはA点(IB)である。

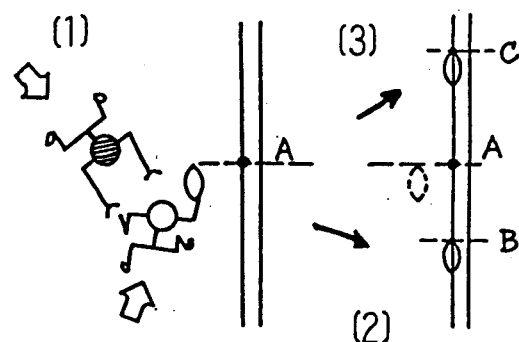
b. 又、状況から判断して、A点がフォワード・プロGRESSとなることが明らかな場合、ホイッスルを吹いてデッドとするのが良い。時計は止めない。

(3) a. タックルされたが、ランナーが踏ん張り前方に倒れてOBダウン。最終的ボールの位置はC点。この場合のフォワード・プロGRESSはC点である。OBであり、時計を止める。

b. 但し、(1)の後、ホイッスルが吹かれていれば、B点で良い。

c. ランナーとタックラーが競っている場合、良く見てからホイッスルを吹こう。さらに前進するかも知れないし、フアンブルがあるかもしれない。

d. OBかIBかを良く判定しよう。IBの場合は、windアップのシグナル(S2)をわすれるな!



4. ゴールライン・プレー

もし、上の1. 2. の場合で、A点がゴールラインならば、すべてタッチダウンとなる。

(II. OBとIB 以下、次号に続く)

理事会報告

理事 喜人 博

1987年4月12日、日体大を拝借して行われた関東審判部総会（兼春季クリニック）に於いて、今後2年間の関東審判部の運営を行う8名からなる理事が承認された。この総会に先立って行われた郵便投票による理事選出選挙の結果に基づくものであった。総会で承認を受けた理事会は今年度合計16回の理事会、10回の全体クリニックを開催してきた。この理事会の活動報告をさせていただく。

最初の理事会では、理事の担当を下記の様に決定した。

部長	水田	吉春
総務・総務担当	喜人	博
総務・組織担当	柴山	忠嗣
総務・渉外担当	小笠原	秀宜
指導育成担当	中村	浩視
指導育成担当	坂井	淳
運営担当	岡本	茂和
会計担当	茂出木	茂春

以上の8人に審判協会笹田理事長を加えた9名で関東審判部の組織の円滑な運営と、審判技術の向上を目標として理事会活動をしている。水田部長を中心として、主としてウィークディの夜、協会事務所（大久保）で種々のテーマに対しての討議、準備をしている。

審判技術向上の施策として、インストラクタ委員会をさっそく設立した。メンバーは、担当理事の中村、坂井両氏をはじめ、メカニック担当として、岡本、敷内、木村、内藤、ルール担当として千田、佐藤（浩）、三樹、喜人の各氏である。インストラクタ委員会の活動成果は、早速、大磯における夏期クリニックの新講習カリキュラムで実施され、続く8月以降のクリニックでは、ケース・スタディを中心に講師陣が活躍している。人数の多い全体クリニックでは検討出来ない内容を、地域単位に集まり、じっくりと勉強しようとして今年度、千田、飯島（秀）の両氏を中心に企画、開催されたのがミニ・クリニックである。今年度は大久保の事務所で開催され、それなりの成果が得られたので、来年度は、各ブロック幹事を推進者として、このミニ・クリニックを拡大する予定である。インストラクタ委員会は、現在、既に春期クリニックを含む来年度の教育計画の立案、新教育方法の開発等を検討している。

年間約400試合相当の審判活動を滞りなく行っていくには、何よりも立派なスキルをもつ要員が必要である。今年度も6月に新人審判員を対象としたオリエンテーションを実施する等、積極的な組織造りを行い、新人24名を含む134名の所帯になった。お蔭で、1月10日のJAPAN・BOWLを最後に今年度の試合は全て終了した。今年も組織担当、運営担当の各理事の努力と、部員全員の協力で、全試合無事終了した。関東審判部のミスで試合が実施出来なかったケースは今年も無く、これで、この記録が少なくとも15年間続くことになった（それ以前は正確

な記録がない）。この1年間に動員した審判員は延べ2600人相当、ボウルゲームのように1試合で30人動員する場合もあるので試合数では400試合弱になる。従って、1人当りの審判試合数は、全体で18試合、秋からスタートする新人を除くと平均21試合である。

総会でもお話ししたように審判員の資格制度に関する検討機関として、審判部内に資格制度検討委員会を設立し、現在検討中である。資格制度の制定には種々の困難な問題があるが、合理的で多くの人の納得する制度の検討をしているところである。

関東地区に限らず、他地域との交流は全国的なフットボールの発展を望む我々にとっても重要なことである。それぞれの協会、連盟が努力されているが、関東審判部も我々の出来る範囲・分野で行ってきた。北海道、東北、長野の各地域担当に対する交流と、教育資料の配付、サポート等である。

1987年度の納会が終了すると、早速、1988年に向けての活動を開始する。新体制として発足した関東審判部が、組織改変の目的に向かって、更に前進するよう、理事会として、益々努力するつもりである。部員の皆さんへも更に協力願うとともに、建設的な意見をどしどし理事会にぶつけられたい。

NEWS編集者より

このFOA・EAST・NEWSは、今年度の活動計画の一環として発行を計画した部内ニュースの第1号である。

関東審判部の活動も活発になり、クリニック、合宿、そしてグラウンドと顔をあわす機会も多いが、134名の所帯ともなると、全員が一堂に会す時は少なく、審判部の活動状況、日頃の所感、クリニックでの討議等を内容として部内コミュニケーションの円滑化から発行しようと思ったものである。加えて、審判協会も設立35年目、遅ればせながら活動の歴史を残すのが現体制を担当する者の責務であるとの認識からでもあった。そのような観点から、過去の審判協会の活動の記録を是非掲載したいと思い、我々の審判協会の大先輩である日本アメリカンフットボール協会安藤理事長に出稿を依頼した。

第1回目でもあり、「気張らず、取り敢えず発行しよう」の気持ちで作成した。この種の部内ニュースは、発行を継続することが重要であると思う。関東審判部の活動報告、所感、理事会報告、紙上クリニック、ケース・スタディ等を内容として、やがては審判協会の外側からの意見も含めて、年3-4回のペースで発行する予定である。皆さんの投稿も歓迎したい。

最後に、今回のニュースの作成に使用したワープロは、JIS第2水準の漢字を備えておらず、今回の原稿の一部の字が平仮名になった。お詫びします。（喜人）